

ウ球菌は急性化膿性中耳炎の原因菌として大きな疑問が持たれる。

質 疑 応 答

栗山 (独協医大) (1) ブドウ球菌黄色株と表皮株の分類同定方法如何。

(2) *Neisseria* の咽頭菌叢における検出がみられないが、採取検体の 37°C 保温が行われなかったのではないか。

杉田 (順天堂大) 黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌の同定方法については現在詳しく記憶していない。後ほど、中検小栗氏、臨床病理小酒井教授に、順天堂の同定の方法を確認してお答えします。

ナイセリア菌などを上気道の常在菌として扱ったのは、従来の細菌学の成績に従った。また、中耳と上気道の細菌の関係という演題は、いままでにあつた欧米の同様な論文もこのようなものになつている。ただし、いずれの論文も、われわれの発表のように、病原

菌を規定している。従つて、われわれの演題および内容もこれで大きな間違いはないように思う。

河村 (順天堂大) 急性化膿性中耳炎の病原菌として黄色ブ菌や表皮ブ菌はきわめて少ない。もし出てくるようなら採取法に問題があるように思う。

本堂 (名市大) 病原菌といつたとき、その決め方を明確にしておけば疾患の因果関係はより明確になると思われるので今後御検討ねがえればと考えます (追加)。

岩沢 (札幌通信) 同一菌種での合致例では、菌の血型型別、**phage typing** などで真の菌種の合致例を見出すべきではないか。

杉田 黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌については、タイピングが必要と思う。だが、過去の論文では、タイプが同じなら薬剤感受性パターンも同じだとする報告がある。従つて、臨床的には薬剤感受性パターンからタイプのちがいを判別してもかまわないと考える。

細菌学的にみた急性化膿性中耳炎の再発

杉 田 麟 也 ・ 河 村 正 三
市 川 銀 一 郎 ・ 後 藤 重 雄 *

目 的

われわれの今まで報告してきた成績で、急性化膿性中耳炎は細菌学的にも上咽頭の影響を強くうけていることが確認された。そこで、次の段階として急性中耳炎再発の予知や治ゆ判定の資料などとして上咽頭の菌が参考になるのではないかと考えた。

対象と方法

急性化膿性中耳炎症例を対象とした。初診時に中耳と上咽頭の菌を使用した。初診時に中耳と上咽頭の菌を使用した。また、臨床所見から治ゆと思われたとき再度、上咽頭の菌を検査した。ただし、治療後の細菌検査は、抗生物質の投与終了後最低 3 日間の間隔をおいた。それは、3 日間あれば、体内から抗生物質が排出され抗生物質の影響がとれるには十分な時間である

と考えたためである。

症例 1. 1 才、男児。

臨床経過は図 1 を参照にされたい。初診時には、中耳および上咽頭とからインフルエンザ菌を検出した。アンピシリン 300 mg/day, 6 日間投与したが第 10 病日に再度耳漏を認めた、このときは、中耳から肺炎球菌と黄色ブドウ球菌を、上咽頭からは肺炎球菌だけを検出した。第 19 病日、局所々見の改善をみ、治ゆと判定したときには上咽頭の菌は上気道の常在菌である *Neisseria* と α -*Streptococcus* だけであつた。本例は以後再発をみていない。

症例 2. 8 才の女児である (図 2)。

初診時は、中耳と上咽頭から肺炎球菌を検出した。アンピシリン、および内服用セファロsporin の投与により炎症所見はおさまつてきた。14 日病日、自覚

* 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室

S. S., 1才, 男児

病日	0	2	5	10	13	19
局所々見	熱 発	耳漏(+) 鼻漏(+)	耳漏(-)	耳漏(+)	耳漏(-)	局所々見改善
抗生物質	小児科より LM	ABPC 300 mg 3 days	ABPC 300 mg 3 days 飲み切り 治ゆ	ABPC 300 mg 3 days		
細菌検査		中耳(鼻咽喉) インフルエンザ菌		中耳(肺炎球菌 黄色ブドウ球菌) 鼻咽喉, 肺炎球菌		鼻咽喉 常在菌

図1 症例1の臨床経過

N. A., 8才, 女児

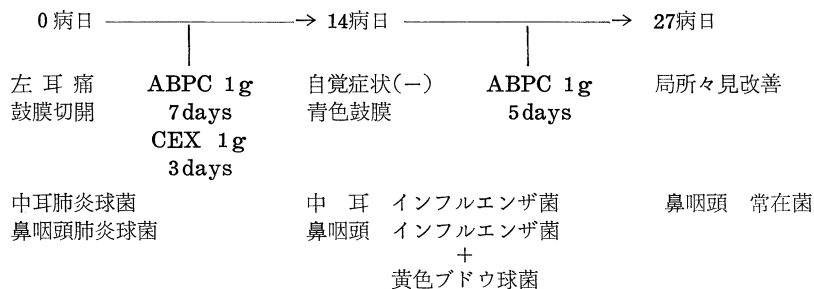


図2 症例2の臨床経過

症状は無いが青色鼓膜となつた, これを, 再度鼓膜切開しかつ色粘性の中耳貯溜液を認めた. そして, 中耳および上咽頭からインフルエンザ菌を検出した. 局所々見がまったく改善したところでは, 上咽頭から常在菌を検出しただけであつた. 本例も以後再発をみていない.

ま と め

① 急性化膿性中耳炎できわめて短時間の間に再発した場合でも, 菌の交代がおり, 初回と違う菌が原

因となつていることがしばしばある.

② 急性化膿性中耳炎の鼓膜所見と上咽頭との菌を比較してみると, 鼓膜所見が改善しても, 上咽頭に病原菌が多数存在するときは中耳炎の再発をすることが多い. 逆に, 上咽頭に常在菌しか存在しないときは, 中耳炎がそのまま治ゆる症例が多いように思われる.

③ 従つて, 急性中耳炎の治ゆ判定基準として, 上咽頭の細菌検査が参考になる.

今後, 症例数を重ねて次回の研究会で報告したい.